

# D. H. ロレンスの「蛇」の詩

— 生命の王者への懺悔 —

鈴木 悟 史

## 〔抄 録〕

D. H. ロレンス (D. H. Lawrence, 1885-1930) の「蛇」(‘Snake’) の詩には、自らの罪について懺悔し、自省するという構図を見出すことができる。

本稿では、「蛇」の詩を考察の結果、蛇が神格化されていること、さらに、近代の呪われた人間教育に基づく「常識」の声につき従う詩人の心と、そのような社会の常識に揺るがされることのない詩人自身の本心との葛藤があること、そして、我々が科学的思考にすっかり浸ってしまっていることがわかった。

真に愚かなのは、他の動物を人間よりも見下し、同じ人間同士で争いを繰り返し、慣習にとらわれてしまい、自己責任において判断・行動することに自信が持てずにいる我々の方であり、我々はこうした傲慢な生活態度を今一度見直すべき時期に直面しているのである。

キーワード ロレンス、「蛇」、懺悔、人間教育、慣習

## 1. 序論

D. H. ロレンスの「蛇」の詩は、動物詩や植物詩を沢山収めた詩集『鳥・獣・花』(*Birds, Beasts, and Flowers*, 1923) の爬虫類 (Reptiles) の項目に収められている。朝日千尺氏<sup>ちせき</sup>が指摘するように、この詩は『鳥・獣・花』の中で最高傑作だとされている<sup>(1)</sup>。この詩が最高傑作だといわれるのは、この詩がロレンスの実体験に基づいて書かれたものであるからということも関係している。その実体験とは、1912年7月、ロレンスが、シチリアのタオルミーナ (Taormina) にあるヴィラ・フォンターナ・ヴェッキア (Villa Fontana Vechia) という借家に住んでいた時の体験であり、ロレンスの妻フリーダ (Frieda Lawrence, 1879-1956) の記した『私ではなくて風が……』(*Not I But the Wind...*, 1935) の中にも記されている。以下にその一部を引用する。

The sun straight on our beds in the morning, we had roses all winter and we lived the rhythm of a simple life, .... Eating, washing up, cleaning the floor and getting water from the

trough near the wall, where the large yellow snake came to drink and drew itself into its hole in the wall again. <sup>(2)</sup>

ある時、ロレンスは黄金色をした大蛇（the large yellow snake）が壁に程近い所にある水桶の水を飲み、再び元来た穴の中へ体を引きずって入っていくのを目撃する。ロレンスは、タオルミーナ滞在中、多くの動植物に出くわすが、とりわけ蛇は彼の注意を引いたといわれている。よって、この体験はロレンスのタオルミーナでの単調な生活リズム（the rhythm of a simple life）に変化をもたらしたといえることができる。以下、「蛇」の詩を考察していくことにする。

## 2. 神格化された蛇

A snake came to my water-trough  
On a hot, hot day, and I in pyjamas for the heat,  
To drink there. <sup>(3)</sup>

第一連では、「蛇」（“A snake”）とロレンスの出会いが描かれている。詩人は「暑さのためにパジャマ姿のまま」（“I in pyjamas for the heat”）「水桶」（“my water-trough”）まで水を飲みに行く。だが、その水桶には蛇が来ていたのである。

In the deep, strange-scented shade of the great dark carob-  
tree  
I came down the steps with my pitcher  
And must wait, must stand and wait, for there he was at  
the trough before me. <sup>(4)</sup>

詩人は「水差しを持って」（“with my pitcher”）「大きなこんもりとしたイナゴマメの深い不思議なおいのする木陰」（“In the deep, strange-scented shade of the great dark carob-tree”）を通過して石段を降りていくが、「蛇が自分よりも先に来ていた」（“he was at the trough before me”）ために「立って待たなければならなかった」（“must stand and wait”）。

この連の四行目では“must”という語が二度使用され、「待たねばならなかった」ことが強調されている。

また、この“stand and wait”はミルトン（John Milton, 1608–1674）のソネットからの引用である<sup>(5)</sup>。このソネットは、失明（Blindness）について書かれているが、最終行には、神の使者としての天使たち（all angels as God’s envoys）が詩人を天に引き上げる役目を果たそうと

「立って待っている」場面がある。

He reached down from a fissure in the earth-wall in the  
gloom  
And trailed his yellow-brown slackness soft-bellied down,  
over the edge of the stone trough  
And rested his throat upon the stone bottom,  
And where the water had dripped from the tap, in a small  
clearness,  
He sipped with his straight mouth,  
Softly drank through his straight gums, into his slack long  
body,  
Silently.

Someone was before me at my water-trough,  
And I, like a second comer, waiting.<sup>(6)</sup>

第三連では、蛇の行動が事細かに描かれており、詩人はまさに文字通り、先客である蛇が水を飲むのを「立って待」ちながら眺めている。今詩人が眺めているこの蛇は、第一連では、「蛇」(“A snake”)、第二連では「彼」(“he”)、そして、第四連では「誰か」(“Someone”)というように言い換えられている。このことから、詩人はこの蛇を動物としての蛇から人間同等の蛇にまで格上げしていることが分かる。そのような蛇が「静かに」(“Softly”)「音も立てずに」(“Silently”)水を飲む様子が、第三連で描かれている。詩人は、その様子がいかに静かであったかを、第二連と第三連でs音を多用することで効果的に表現している。さらに、このs音や第三連の“reached”のような長母音を配することで、蛇のゆったりとした動きやスルスルと進む動きを表現している。

このようなことから、詩人はこの蛇との出会いに特別な思い入れがあると考えられる。例えば、第四連では、再び“before me”という語が使用されており、詩人が蛇より後に来た自分のことを“a second comer”と称するなど、蛇に対する譲歩が強調されているが、それは「水を飲む」のは単に人間だけではなく、あらゆる生き物に共通のことであるという認識をしているためである。

He lifted his head from his drinking, as cattle do,  
And looked at me vaguely, as drinking cattle do,

And flickered his two-forked tongue from his lips, and  
mused a moment,  
And stooped and drank a little more,  
Being earth-brown, earth-golden from the burning bowels  
of the earth  
On the day of Sicilian July, with Etna smoking.<sup>(7)</sup>

第五連では、この蛇の二面性がうかがえる。一行目と二行目では「牛がやるように」（“as cattle do”）水を飲み、「ぼんやりと眺め」（“looked at me vaguely”）るといった半ば擬人的な蛇の姿が描かれている。実際は爬虫類の脳は本能的・原始的であり、思考能力は備わっていない。だが、その擬人的描写が、あたかも蛇までもが、人間と自分のどちらが先に地上に登場したのかを考えているかのような効果を醸し出している。このように、ロレンスの詩では、動植物を擬人的に描写したものが多くみられる。また、三行目では、「二股に分かれた舌をちらつかせ」（“flickered his two-forked tongue from his lips”）るといった、人間に慣れ親しんだ動物ならば行わない、蛇特有の恐ろしい威嚇の動作をしている。

The voice of my education said to me  
He must be killed,  
For in Sicily the black, black snakes are innocent, the gold  
are venomous.  
  
And voices in me said, If you were a man  
You would take a stick and break him now, and finish  
him off.<sup>(8)</sup>

第六連では、詩人が受けた「教育の声」（“The voice of my education”）が詩人に毒蛇を殺すように言う。

第六連で「殺す」（“kill”）という語が用いられているが、「殺す」という行為は、自分の勝手な判断で他の生命を絶つことを意味している。確かに、毒蛇の存在は人間にとって脅威的である。だが、毒蛇が毒を有するのは、自分の身（生命）を守るために生活上必要な手段であり、自分の生命を他者から奪われることを避けるためである。よって、本来、生命の危険にさらされない限りは安易に用いられることはないのである。だが、人間は自分たちが有する知識を用いて、蛇を人間以外の動物に分類し、色によって人間に有害か無害かを区別し、もし有害であるならば「その蛇は殺されなければならない」（“He must be killed”）と判断する。

But must I confess how I liked him,  
How glad I was he had come like a guest in quiet, to drink  
at my water-trough  
And depart peaceful, pacified, and thankless,  
Into the burning bowels of this earth?

Was it cowardice, that I dared not kill him?  
Was it perversity, that I longed to talk to him?  
Was it humility, to feel so honoured?  
I felt so honoured.<sup>(9)</sup>

詩人は第八連、第九連で「常識」の声と自分の本心との間で葛藤を生じさせている。しかしここで、自分の本心を「白状しなければならない」(“must I confess”)と言い、“How”を用いて蛇に対する強い思い入れを吐露する。第八連では、蛇にえもいわれぬ親近感を抱いており、「常識」としての教育は意味を成さない。だが、第九連では、“Was it + 名詞 + that (またはto不定詞)”の強調構文を用いて、自分の本心と「常識」の声のどちらが正しいのかを謙虚に自問し確認するなど、詩人の揺れ動く心の葛藤を見事に描いている。そして、最終行で“I felt so honoured”と言い、自分の本心を重んじていることを強調している。

And yet those voices:  
*If you were not afraid, you would kill him!*

And truly I was afraid, I was most afraid,  
But even so, honoured still more  
That he should seek my hospitality  
From out the dark door of the secret earth.<sup>(10)</sup>

しかし、「常識」の声は「もし怖くないならおまえはあいつを殺すだろう」(“If you were not afraid, you would kill him!”)と囁きかける。第十一連で、詩人は「実は怖かったのだ、本当に怖かったのだ」(“truly I was afraid, I was most afraid”)と毒蛇に対して恐怖心を抱いていたことを自認するが、その一方で「そうだったにしても、ぼくはなおさら光榮に思ったのだ」(“But even so, honoured still more”)と言う。第九連と第十一連には“honoured”という語が三度使用されているが、詩人が「光榮に思った」(“honoured”)のは教育の声に流されなかつ

たことで自分に「敬意を払われたように感じた」（“to feel so honoured”）からである。このことは、詩人にとってはこの蛇がもはや「毒蛇」（“venomous” snake）ではなく、未知の暗い地球の中心である「この大地の燃える腹の中」（“Into the burning bowels of this earth”）から来た使者としての神格性を帯びた蛇（holy “innocent” [= “harmless”] snake）であることを示唆している。また、蛇は脱皮するので原初の時代から、不死の象徴とされている。よって神格性を帯びた大蛇は腸と似ているとされ、「大地の腸」と同一視された。第十一連の四行目に「大地の腹」（“bowels of this earth”）とあるが、このような表現はそのことと関連しているのである。

ところで、初期キリスト教の一分派である拝蛇教の教徒（Ophites）は、創造主ヤルダバオトがアダムとイヴを造り、「毒が回って死に至る」と偽ることで彼らが木の実を食べるのを禁じたが、ヤルダバオトの母ソフィアに遣われた蛇がアダムとイヴを誘惑し、木の実を食べさせ、真の知恵である理性と知性を与えたのは明白であるから、「蛇は人類の救世主であり、自らのもたらした啓示のために神のみもとで苦しんだキリストが、キリストとして出現する以前にこの世に現れた姿である」と主張している。ここで拝蛇教徒のいう蛇も神格性を帯びた蛇であるといえる。

詩人は第十一連の三、四行目において、「蛇」（“he”）が「奥深い大地の戸口から出てきて、僕のもてなしを求めているに違いない」（“he should seek my hospitality / From out the dark door of the secret earth.”）と言っている。ここで用いられている“hospitality”という語は、“hospital”から派生した語である。“hospital”という語の原義は、「主人[=host]が客[=guest]をもてなす所」である。よって、“hospitality”は「（人を）親切に[手厚く]もてなすこと」や「寛容さ、（～を）快く受け入れること」の意味を持つ。このとき、前者の意味を「蛇」の詩に当てはめると、「主人」である詩人が、招待されて他所からやってきた「客」である蛇を「手厚くもてなすこと」という意味になる。同様に、後者の意味を考慮してみると、樂園追放時の蛇の悪行である誘惑（『創世記』3：1-7）の罪を、さらにその誘惑の罪によって神より受けた罰（『創世記』3：14）を「寛大な心を持って許す、受け入れること」という意味になる。こうした「寛容な心を持って許す、受け入れること」は、キリスト教の重要な徳目であるとされている。

このように考えると、第五連で擬人化された蛇が「牛がやるように、飲んでいたところから頭を上げ、牛が飲むようにぼんやりと」詩人を見て、「唇から二股に分かれた舌をちらつかせ、少し考え込み、頭を下げてもう少し飲んだ」のは、主人たる詩人が「招待客をもてなすような寛容さ」、さらには「神が蛇の罪罰を寛大な心を持って許す」ような心境で待っているということが蛇に伝わったからであるということがわかる。

He drank enough

And lifted his head, dreamily, as one who has drunken,

And flickered his tongue like a forked night on the air, so  
black,  
Seeming to lick his lips,  
And looked around like a god, unseeing, into the air,  
And slowly turned his head,  
And slowly, very slowly, as if thrice adream,  
Proceeded to draw his slow length curving round  
And climb again the broken bank of my wall-face.<sup>(11)</sup>

第十二連では、“drank”, “drunken”, “like a god”, “adream” といった人間の描写によく用いられる語句が使用されている。この連で描かれている蛇の動きは非常に鈍重であり、その様子が “And” の多用や 「のろのろ、実にのろのろ、全く夢を見ているかのように」 (“slowly, very slowly, as if thrice adream,”)、さらに「丸くくねる鈍重な身体を引きずり」 (“Proceeded to draw his slow length curving round”) という表現で明確に示されている。

また、最終行では、蛇は「再び壁面の壊れた斜面を登り始め」 (“climb again the broken bank of my wall-face”)、もと来た穴へ戻ろうとする。この蛇が出入りしている穴は、本稿の冒頭の ‘Not I But the Wind...’ の引用部では “hole in the wall” と書かれており、この「蛇」の詩の中では、第三連に “in the earth-wall in the gloom”、第八連には “the burning bowels of this earth”、第十一連に “the dark door of the secret earth” とあるように、地上と地下とを結ぶ暗い出入り口であることがわかる。よって、第十二連でも第十一連から続く「使者としての神格性を帯びた蛇」のイメージがうかがえる。

### 3. 懺悔

前章に続いて第十三連以降を考察する。

And as he put his head into that dreadful hole,  
And as he slowly drew up, snake-easing his shoulders, and  
entered farther,  
A sort of horror, a sort of protest against his withdrawing  
into that horrid black hole,  
Deliberately going into the blackness, and slowly drawing  
himself after,  
Overcame me now his back was turned.<sup>(12)</sup>

蛇が出入りしている穴は「あの恐ろしい穴」(“that dreadful hole”)や「あの恐ろしい暗い穴」(“that horrid black hole”)と表現され、最終的には「暗闇」(“the blackness”)と書かれている。詩人はこの連でも“*And*”の多用効果を続け、蛇の緩やかな動きを「蛇のやり方でゆっくり進む」(“snake-easing”)という造語で表している。

この蛇の緩やかな動きをみた詩人は、「のろのろと身体を引きずっていくことに対する、ある種の恐怖とある種の抗議」(“A sort of horror, a sort of protest against his withdrawing”)に襲われる。蛇は次第に暗闇へと入りつつあるが、途中で「背中がぐるとねじれ」(“his back was turned”)る。詩人はその様子を見てさらに嫌悪感を強める。それは、“his back was turned”という語句に、蛇が「背を返して腹を見せる」という意味と、蛇が詩人を「見捨てて立ち去る」という二種類の意味が込められていることからわかる。

I looked round, I put down my pitcher,  
I picked up a clumsy log  
And threw it at the water-trough with a clatter.

I think it did not hit him,  
But suddenly that part of him that was left behind convulsed in undignified haste,  
Writhed like lightning, and was gone  
Into the black hole, the earth-lipped fissure in the wall-front.

At which, in the intense still noon, I stared with fascination.<sup>(13)</sup>

第十三連で蛇への嫌悪感を強めた詩人は、第十四連で「辺りを見回し、水差しを置き、ごつごつした丸太をつかみ、水飲み場の方にガタンと投げ」る。幸い、蛇には「当たらなかった」(“it did not hit him”)が、蛇は蛇らしからぬ素早い動きで「あの暗い穴、塀の前面の土地の唇のように裂けた割れ目」(“the black hole, the earth-lipped fissure in the wall-front.”)に入っていく。このとき、蛇にとっての穴はもと来た所へ戻る穴であるが、詩人にとっては単なる穴ではない。詩人は、蛇が割れ目に素早く戻る様子を「魅せられたように見つめていた」(“I stared with fascination”)が、それは蛇を男性器に、また割れ目を女性器に見立てたからである。

And immediately I regretted it.



I thought how paltry, how vulgar, what a mean act!  
I despised myself and the voices of my accursed human  
education.<sup>(14)</sup>

第十六連で、詩人は丸太を水飲み場の蛇に投げつけたことを後悔し、「自分自身」(“myself”)とそのような人間を無数に生産している「呪われた人間教育の声」(“the voices of my accursed human education”)とを軽蔑している。

“human”という語は「(動物に対して)思いやりがある、人情味のある」という意味であるから、人間は自分の身に比べて人の身について思い、相手の立場や気持ちを理解することができる生き物であるということになる。だが、詩人の蛇に対する行動は思いやりに欠けた、相手の立場や気持ちを無視したものであったというほかない。

And I thought of the albatross,  
And I wished he would come back, my snake.

For he seemed to me again like a king,  
Like a king in exile, uncrowned in the underworld,  
Now due to be crowned again.

And so, I missed my chance with one of the lords  
Of life.  
And I have something to expiate;  
A pettiness.<sup>(15)</sup>

上述の通り、第十六連で詩人は後悔し、第十七連で、詩人は「アホウドリ」(“the albatross”)のことを想起する。このアホウドリは、コールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834) のバラッド詩「老水夫行」(“The Rime of the Ancient Mariner”)の中の老水夫に殺されたアホウドリを指す。

「老水夫行」では、罪や呪いと免罪が主題とされているが、「蛇」の詩の詩人は老水夫に、蛇はアホウドリに例えられていることから、この主題は「蛇」の詩にも共通しているといえる。第十七連二行目では、詩人が蛇を“my snake”と呼ぶことにより、最上級の親しみを込めている。

第十八連には、詩人が蛇に再度戻ってきてほしいと願う理由が記されているが、それは、蛇が「追放されて」(“in exile”)今は「地下の世界で王冠を失っている」(“uncrowned in the

underworld”）が、「今まさに再び戴冠してしかるべき」（“Now due to be crowned again”）王のように見えたからである。この連の二行目にある“uncrowned”には、「冠を戴いてはいないが実権のある」という意味があり、詩人が蛇の復権を願う強い気持ちが込められている。

最終連である第十九連には、「生命の王者」（“the lords / Of life”）とあるが、このような表現をした作家はロレンス以外にも存在する。

エマスン（Ralph Waldo Emerson, 1803-1882）は、詩「経験」（‘Experience’）の冒頭で“The lords of life, the lords of life, —”と呼びかけている。

The lords of life, the lords of life, —

I saw them pass,

In their own guise<sup>(16)</sup>

エマスンは、この詩で「生命の王者」は「様々な姿かたちをして」（“In their own guise”）いるという。これは、万物に霊が存在するというアニミズムの思想に基づいている。

エマスンは、「経験」（‘Experience’）や「自己信頼」（‘Self-Reliance’）というエッセイの中で、繰り返し自発的な行動の大切さを説いている。特に「自己信頼」の中では、人間は自らの内部にこそ神を有するとし、集団よりも個に絶対的な価値を見出している。

It is easy in the world to live after the world's opinion; it is easy in solitude to live after our own; but the great man is he who in the midst of the crowd keeps with perfect sweetness the independence of solitude.

The objection to conforming to usages that have become dead to you is that it scatters your force.... But do your work, and I shall know you. Do your work, and you shall reinforce yourself.<sup>(17)</sup>

エマスンは、この中で集団によって形成された慣習につき従い、個が抑圧されることの恐ろしさを説く。1832年10月14日のエマスンの日記にも、集団に同調することの恐ろしさが綴られている。

Chardon St. Oct. 14, 1832. The great difficulty is that men do not think enough of themselves, do not consider what it is that they are sacrificing, when they follow in a herd, or when they cater for their establishment.<sup>(18)</sup>

エマスンが主張するように、慣習という社会の産物の中に自らの身を委ねるのは容易いこと

ではあるが、それと同時に我々は慣習に従わない行動に不安を感じ、自己を全面的に信頼し判断することができず個性を失っていくことになる。

このように、ロレンスの「蛇」の詩にみられる詩人の心の葛藤や詩人が最終的にとった行動は、このエマスの危惧する没個性化と深く関連している。

心の葛藤の末、心無い行動を取ってしまった詩人は、最終的に「生命の王者の一人に会う機会を逃した」(“I missed my chance with one of the lords / Of life”) が、「償うものがある；取るに足りないささいな行為だ」(“I have something to expiate; / A pettiness”) と言っている。償うとは、自らの罪について懺悔し、自省することをいう。

我々は、この「蛇」の詩を通じて、詩人・老水夫・人類が、神格化された蛇・アホウドリ・自然に自らの罪について懺悔し、自省するという共通の構図を見出すことができるのである。

#### 4. 結論

以上、「蛇」の詩を順を追って考察し、詩の中に登場する蛇が神格化されていること、さらに、詩人がその蛇と出会い、心の中に葛藤を生じていること、そして、神格化された蛇が、詩人の自省のための対象となっていることがわかった。

ロレンスは、この詩の後半で近代の呪われた人間教育についてふれ、我々が科学的思考に浸っていることを提示し、取るに足りないささいな行為を繰り返している罪を告白し、償うことの大切さを説いている。このことは現代の我々にも当てはまることである。

我々には、『創世記』に登場する蛇や「老水夫行」のアホウドリ、「生命の王者」の存在を嘲笑する資格はない。真に愚かなのは、他の動物を人間よりも見下し、同じ人間同士で争いを繰り返す、慣習にとらわれてしまい、自己責任において判断・行動することに自信が持てずにいる我々の方である。我々はこうした傲慢な生活態度を今一度見直すべき時期に直面しているのである。

#### 〔注〕

- (1) 飯田武郎著『D・H・ロレンス：詩と自然』p.55, 第二章 ‘The Immediate Present’ (「即時性」と「ハイク・モメント」—『鳥とけものと花』と俳句—)
- (2) Frieda Lawrence, *Not I But the Wind...* (London & Toronto: Heinemann, 1935 p.106) (イタリックスは筆者)
- (3) Vivian De Sola Pinto and Warren Roberts (ed.), *The Complete Poems of D. H. Lawrence* (Harmondsworth: Penguin Twentieth-Century Classics, 1993) p.349
- (4) *Loc. cit.*
- (5) 「ソネット19番」(*Sonnet XIX*) 参照
- (6) *op. cit.* p.349

- (7) *Loc. cit.*
- (8) *Ibid.*, p.350
- (9) *Loc. cit.*
- (10) *Loc. cit.*
- (11) *Loc. cit.*
- (12) *Ibid.*, p.351
- (13) *Loc. cit.*
- (14) *Loc. cit.*
- (15) *Loc. cit.* (イタリックスは筆者)
- (16) Richard Poirier (ed.), *Ralph Waldo Emerson* (Oxford : Oxford Univ. The Oxford authors, 1990) p.216  
(イタリックスは筆者)
- (17) Emerson, 'Self-Reliance', pp.53-54
- (18) Emerson, *Journals*, Vol. 4 pp.49-50

(すずき さとし 文学研究科英米文学専攻博士後期課程)

(指導：古我 正和 教授)

2005年10月19日受理